

平和の礎

軍人軍属短期在職者が語り継ぐ労苦Ⅱ



平和の礎

軍人軍属短期在職者が語り継ぐ労苦Ⅱ

平和の礎

軍人軍属短期在職者が語り継ぐ労苦Ⅱ

平成四年三月三十日 印刷

平成四年三月三十日 発行

編集 東京都文京区大塚五丁目三ノ十三
発行 平和祈念事業特別基金
印刷 第一法規出版株式会社

ま え が き

平和祈念事業特別基金は、今次大戦における尊い戦争犠牲者を銘記し、かつ永遠の平和を祈念するため、関係者の労苦について国民の理解を深めること等により、関係者に対し慰藉の念を示す事業を行うことを目的として「平和祈念事業特別基金等に関する法律」に基づいて設立された。

基金法には、この目的を達成するために行うべき各種の業務が定められているが、この「平和の礎——軍人軍属短期在職者が語り継ぐ労苦——」の作成は、その中の関係者の労苦に関する調査研究並びに関係者の労苦にし、出版物を作成し及び頒布する業務に係るものである。

この業務の実施に当たり、基金は、平成元年度から社団法人元軍人軍属短期在職者協力協会及び軍人軍属恩欠者全国連盟に、主として次の三つの観点から従軍体験者の手記の執筆あるいは聞き取り等により、労苦の実態を明らかにすることをねらいとして調査研究を委託した。

- (一) 兵役と家族状況
- (二) 軍務・戦闘と意識
- (三) 復員後の生活と家族

協会及び恩欠連では、基金からの委託に基づき、全国的に広範囲にわたり活発な調査研究活動を展開し、関係者から数多くの体験記等を収集し整理の上、「恩給欠格者に係わる労苦に関する調査研究報告書」として基金に報告がなされた。

報告された労苦記録の各篇々には、中国、南方、旧満州等各地で軍務に服し、過酷な戦闘体験を始めとして特に短期の軍務服役であるため、階級、身分の差による辛酸などの多様な労苦の実態が、簡潔であるが往時を想起させるに十分な迫真の筆致で生々しく描かれている。

戦争の残酷さ、残酷さ、悲惨さ、その上いかに無意味なものか、翻えて平和の尊さ大切さを心に深く印し、子々孫々に語り継いでいくためには体験者にして初めて明らかにされる具体的な労苦の記録は、この上なく貴重なものであり、その労苦を徒労に終らせないためにも、永く保存され周知されるべきものと認められる。

基金は、今般協会から報告された平成二年度分の労苦調査記録を基金の設立目的に照らし、その成果を基金業務報告資料として取りまとめるとともに、本資料を永遠の平和の礎として出版物として頒布することにより、平和祈念事業の一層の理解と認識を深めることに資することとした。

調査に当たられた協会及び恩欠連関係者のご努力と寄稿された多くの方々のご協力を感謝するとともに、本書が平和祈念の書として広く役立ちうるならばこれに越した喜びはない。

平成四年三月

平和祈念事業特別基金

理事長

藤 井 良 二

軍人軍属短期在職者が語り継ぐ労苦 II 目次

まえがき

藤井 良二

第一部 労苦体験記

〔南 方〕（フィリピン）

比島散華

松田 勇 1 頁

比島戦記

橋本 和水 11

私の軍隊日誌（ルソン戦末期）

藤川 一男 24

コレヒドール島玉砕記

野中 義治 36

私の戦争苦勞の思い出

東 晴告 41

海の上の地獄

後藤 行男 46

〔南 方〕（ビルマ）

回想記

田中 昭 51

ビルマの密林

稲垣 金増 57

逃避行

山岸 利治 59

〔南 方〕（ニューギニア）

ニューギニア最前戦

戦争とは

太平洋戦争参加苦勞体験記

南海に戦う

田中 英雄 63

斎藤 芳郎 66

大山 宏 69

長峯 利夫 74

〔南 方〕（その他）

満州からパラオまで

私の体験記

死の草原マリンブンよりの生還

親切に国境はない

サイゴンでの苦汁

ボナベ島従軍記

主な労苦の実態

南海孤島での守備隊

佐々木由一郎 83

小川 佳男 91

脇村 英一 98

三股崎 修 103

澤 正一 106

菅井 元吉 108

江崎 萬策 113

萱野 明 115

〔北 支〕

出征苦勞体験記

長城線に戦って

河原 導夫 121

天野 章一 125

旅団作戦の作戦伝令として

中国戦線の思い出の記

回想録

岡本 徹恵 184

羽柴曉太郎 127

大下 泰司 132

〔中 支〕

湘桂作戦初年兵の思い

中国における私の歩み

誠心は必ず通じる

軍隊生活の思い出

苦しい一等兵

死んだ方が楽、生と死は紙一重

輜重兵奮闘記

追 想

大陸の戦い

湖北殲滅作戦

八路军との戦い

中国戦場での悪夢

針の山

浙贛作戦と内地部隊

行 軍

渡辺 久喜 138

中村 文雄 140

村木 茂 145

平田 昌次 149

松浦 貞一 152

山田 隆一 157

林 忍 159

小林 詮一 161

吉田 新一 167

杉江 彦保 170

伊藤 万司 171

金子 富栄 174

新藤 榮一 179

正岡 建美 182

〔南 支〕

軍隊生活

私の体験

〔満 州〕

酷寒の地に虜われて

戦争体験の記

ソ満国境警備体験記

鉄道連隊従軍記

私の軍隊経験

物資輸送と戦争

人間万事塞翁が馬

〔海 軍〕

私の従軍戦記

硫黄島戦記

海の闘い

原田 養一 187

鈴木 勝美 188

稲垣 康 191

西尾 龜三 197

末木 定弘 200

渡会美尾次 202

寺西 公男 205

鈴木 照司 208

忍足 諗 210

松田 佼 216

宮下 孝雄 221

鶴見 一義 224

北の海のリターン

佐久間千鶴夫 225

潜水艇中の潜水艇

今泉 一郎 228

一等輸送艦九号の奮闘

宮下 政司 229

〔その他〕

占守島の戦闘

土橋 治雄 233

私の軍隊生活の思い出より

後藤 三雄 236

対空戦と復員輸送記

白井 哲哉 247

第二部 聴取調査記録

〔南 方〕（フィリピン）

比島で召集されて

酒本数三郎 251

レイテ島戦記

勝部 孝吉 255

鉄兵団バレット峠の死闘

山下 正雄 257

船舶砲兵決死の対空対潜戦

倉本 寛次 262

末期フィリピンの戦車隊で生き残る

弓井 崇弘 270

〔南 方〕（ビルマ）

ビルマ戦記

仏に救われたビルマ撤退記

苦勞と犠牲の多かった

ビルマの工兵連隊

ビルマ戦倒れた友は撤退・救援戦闘

よくぞ生きて還ったビルマの初年兵

末期的ビルマ作戦死境を越えて

〔南 方〕（ニューギニア）

浜田第二十一連隊第三大隊

馬來、ニューギニアの死闘

東部ニューギニア第七十九連隊

ジャングルの苦闘

〔南 方〕（その他）

熱帯戦場と食糧

ミランダオ島の攻防戦

南方戦線ハルマヘラ苦闘記

竹内以知司 279

山本 義男 284

藤井 力泉 283

吉福 周一 297

荒川 猛 300

五十嵐新一郎 303

国谷 得市 310

上田 健二 316

右田 弘 327

田中 堅一 329

飯塚 静男 332

仏印での情報班員父は中国で獄死

ボルネオ・パリックパパン

二十二特別根拠地隊

〔中 支〕

修水河の渡河戦

機工兵の話

三十七歳の初年兵

中支千里を擲弾筒と共に

工兵は作戦軍の舞台作り

〔南 支〕

衛生兵勤務あれこれ

大隊本部の苦悩

鯨隠密挺進隊苦心懷古録

中国最南端雷州半島

死闘した独歩七十大隊

召集初年兵中南支に転戦

稲積 三郎 337

松田 正富 340

佐藤 狷介 344

島川 秋男 347

奥浜 隆雄 350

足利 良三 352

森口 正一 355

野中 悌延 361

斉藤 榮 363

山地 豊重 367

猪熊 保 372

沢田 良男 377

〔満 州〕

ノモンハンから終戦後一か年

人間万事塞翁が馬

満州では軽機射手

再奉公は軍属で終戦

山砲第九連隊満州の訓練も命がけ

〔海 軍〕

第八海防艦物語

海軍航空隊員従軍よもやま話

海軍志願兵の思い出話

駆逐艦「五月雨」

〔その他〕

死行列車の始発駅

うらみ深き七番ホーム

台湾要塞砲戦記

私の軍隊経歴

北朝鮮会寧歩兵砲隊現役三か年

三木 一之 381

惣田 甚郎 384

清水 俊彦 389

松田 昇 392

物井與太郎 399

大山 松重 402

渡辺 善夫 406

保川進治郎 412

砂田 慶洲 416

大場 秋蔵 418

渡辺孝三郎 419

南方（フィリピン）

比島散華

兵庫県 松田 勇

私達は今、さいわいにも安定した生活をしている。しかしふりかえれば青春の時期を一にも二にも軍国主義さんびの世を送らされた。亡き多くの戦友は終戦後にいたるまでの悪戦苦闘、そのうえ飢餓の道をおるいたのだ。国にむくい故郷をしのびそして家族をあんじながらも必勝を信じて異国の山河にさんげしていった。忘れようとして忘れ得ぬにがい苦しい行動体験を記憶をたどってここに書き、亡き聖霊にささげます。

「忠霊塔に日の丸立つ」

第十師団出動命令の暗号電文です。時、昭和十九年七月二十八日。八月四月駐屯地出発、いちろ満州鉄道で南下す。同八日釜山着、十五日出航、門司港内に二日間停泊、もちろん船内のかいこだなに缶詰状態だった。

「外見厳禁」、十七日梯団編成出港、台湾行きを発表、二十八日基隆入港、その間船は東西南北と航行した。なかでも鹿児島湾に二日間停泊、そのとき退船避難訓練で飛び込みの練習をした。

台湾全域が師団防衛区のため全部隊が分駐配備した。師団司令部は台中に、我が隊本部は南四十キロの彰化街にちゅうりゅうした。十月十二日台湾海空戦に参加活動し、十二月十三日高雄港より比島に出航す。師団先発船「有馬山丸」でレイテ島にむかったが、時遅く上陸を断念しルソン島マニラに上陸を目指す。主力は「大威丸」「乾

瑞丸」「江の島丸」の三船にぶんじょうし、ルソン島へむかった。出港時より上空に九七式飛行大艇（四発エンジン）が最南端のガランビの灯台まで警戒をしてくれたのもしく感じた。

バシー海峡波高く、日夜空と海の監視は大変だった。一升瓶の波間に浮かぶのを見て潜水艦の潜望鏡とみましかえすることもありまた食事も船酔いでとれない。舷側にかせつした便所は用を足すとき、荒波に尻を洗われる。これが本当の水洗式だ。かくして二十三日「江の島丸」は北端のアバリに入港し、「大威丸」は北サンフェルナンド港に十時にとうびょうした。

前日より機関調子悪くすこし遅れていた「乾瑞丸」は北サンフェルナンド北方ダンケヨス西北四海里洋上にて敵潜魚雷三発で撃沈された。ときに十一時三十分だ。

「大威丸」乗船各隊はこの時点では分秒をきそって陸揚作業のさいちゅうだったが「乾瑞丸」の爆発音は耳にした。一瞬にして水くかばねになられた輸送指揮官鍋島部隊長以下多くの戦友が一番あわれだ。我、敵がいにえたり。

「大威丸」下船時に大隊副官より

「松田、上陸後は別令あるまで大隊長のそばを一刻もはなれることなく従身せよ」

と厳令を受けた。正午ごろ軍と師団の参謀が港の砂浜に各部隊指揮官の集合を命じ、現況説明と作戰命令を伝達された。輜重兵十連隊からは我が大隊長が出席された。一步後方で砂上に書かれた地形と作命をはいちようした。いよいよ決戦のときだ。生還はないぞ、血がさわぎ、身体がむしゃぶるのを感じた。これから二十二年十二月復員するまでの二年間、生き地獄の戦場とくつじよくの捕虜生活が始まった。

海没した「乾瑞丸」の救援のため第四中隊の一個小隊の車両に各部隊医務関係者、医薬品、警備要員に歩兵一個小隊が分乗して三号国道、北部ルソン島西岸線を北上のため、十五、六時ごろ出発した。夕闇せまる道路上に街路樹が倒れている。排除して前進。また路上に障害物あり、そのつど歩兵は散開警備し、大隊長は自分のほか五、六人の歩兵と海岸線をそうさくする。闇夜の浜辺でラッパ号音が最高の信号となる。力一杯びびく音に何の

反応もなし。北方三十キロほどきたが、反転し引きかえした。

いま通った道路にまた同じような障害物がある。米比軍ゲリラのしわざだ。攻撃はないがぶきみな状態だ。東の空のしらむころに海難の浜辺についた。赤ふんどし一本でたおれている者、重油をあびて全身真っ黒になっている遺体、手足のない人、腹がやぶれ内臓の出ている人、後頭部が割れて脳しんが飛び出しながらからっぽの遺体等々その惨状は筆舌につくせない。自分自身がいような精神状態になっていた。我にかえたとき、思い出したが、昨日早朝に食事をとっていらしい一昼夜、口に何も入れてなかった。

サアいよいよ本任務に全力をつくすのだ。港湾で敵機の襲来の間隙をみてのにやくは骨がおれた。各隊へ輸送、積込みの指示等昼夜の別なく走りまわった。にやく用の木造小型船が山口県宇部港からきていたのに驚いた。「栄豊丸」という。親子二人で船と共に徴用されてきたとのことだ。

おやじさんは平気な顔で、

「ここに来るまでに二度も三度も飛行機にねらわれました。そこここに機関砲のだんこんがあるでしょう。お国のためです」

と一生懸命陸揚げ作業をやっている。ただ頭のさがる思ひだった。

大晦日がきて、迎春の準備に主計将校と市場へ買入れに行った。日本人の口にあうような物はない。そばをみると甘藷がある。口にしてみると日本の薩摩芋とかわりなく味にもおなじだ。これを正月のいわいぜんにすべく購買を申入れると、なんと一袋一万円で、計八万円だ。本部金庫に十二万円の軍票よりなし、残金のことを考えず買い取った。この頃、比島人は日本軍の不利を察知し軍票の価値なしとみていた。

「北サン（北サンフェルナンド）の

藪に芋焼く初日の出」

米軍も元日は休日か、爆音も砲声も終日なし。あけて二日は早朝から爆音高く偵察機が超低空できた。地上からは高射砲、機関銃で弾幕をつくる。そのなかを勇敢にも飛びまわった。

各隊はそれぞれ任地にふじんし陣地こうちくにちゃくしゅしている。港湾にはたりようの軍需物資がやまずみされわずかな警備要員だけだ。我が隊は全資材輸送のため昼間はいんべい行動をし、日没からふつぎようまでがフル回転だ。この港の南側にポロ岬という幅五百メートル長さ三キロぐらいの半島があり、南港も波おだやかな良港です。

暮の二十八日に三隻の大型船が入港した。兵員より早く同時にグラマンの大編隊がしゅらいしものすごい爆撃をかんこうした。地上対空火器も少数ながら応戦した。私は所在なく高射砲陣地の空壕に入ってぼうかんしていた。被爆船は弾薬燃料に引火し大音響とともに真っ赤に燃え、外板がベラベラと海中に落ちて龍骨や助骨をみせながら沈んで行く。この間三十分ほどだった。

一月五日、サンホセへ転進せよの命あり、残存物資に火をつける。残念。甘味品等を持って指揮官車に乗りこんだ。操縦手は満州の原野で十分訓練した腕自慢の戦友です。夜道でもどんどん走った。五号道路の要衝サンホセに到着、師団司令部はここにいた。我が隊は奥地の盆

地のようなブンカンのその奥のビノンへと進み、川原の山かげに満州からけいこうの八錐形天幕を張って本部とした。

マニラ、アバリ、北サン等の軍需品輸送に全力をけいちゅうした。私はこのとき台湾で罹病した熱帯マラリヤに三日熱が併発し四十余度の高熱でなれば人事不省のごとく記憶がうすれ、無気力状態だった。

早朝、五号国道へ出て見た。路端に木箱が一個、他隊の落し物と持ち帰り開いてみると軍票満杯の金庫だった。今の私達にすると金庫一つより弾薬糧秣の一箱を尊重する時です。これは無用の長物と河原に穴をほってうめた。各部隊が国道をしきりに北上する。もちろん戦火をのがれた在留邦人もぞくぞくとやいんにまぎれての行動だ。北部ルソンの穀倉地帯カガヤン河流域へ食を求め、軍の庇護と安全のための移動です。回顧すれば邦人は早期に米軍に抑留される方法を取るべきだった。

二月になった。バレテ峠を越え、ヌエバビスカヤ州へ足をふみ入れた。後日比島における最大激戦地になるのだ。峠の北側登り口のサンタフェノの川を渡った峠のう

ちぶところの大和谷に本部を設置した。自動車大隊は東北二十キロアリタオ街の対岸マンガンの山麓を拠点基地とし持久戦にそなへ、自動車壕を掘って格納準備完了。輸送物資もとばしくなり燃料も少なくなった。軍馬も寒さには驚くほど強いが暑さには弱く、満州からの軍馬は全滅した。道路事情が悪く自動車の走れない道を自動車の兵隊が馬車両に弾薬を積載し引っぱっていった。何度も何度も積み降ろしをしたため丈夫な弾薬箱もこわれて砲弾が鉄のかたまりとして一つころがっている。一弾四十キロもある。これを前線陣地にはこぶ苦労は大変だ。巻脚絆で徳利むすびにしてせおい、ジャングルの山も谷もはいながらすいこうした。

三月六日、第一線妙高山陣地に出撃命令がくだる。自動車隊は後方長距離輸送のため、ゲリラ、落下傘降下部隊等の奇襲にそなえて常時歩兵訓練をしていた。そく一線歩兵隊に改編出来る。高射機関銃を受け取り、修理班機工が脚をつくりなおし地上用に改造し従来の軽機関銃要員をもって重機関銃小隊を編成し第二大隊本部、四、五中隊及び六中隊の重機関銃小隊で、自動車男の花道だ

と勇躍妙高山へ出陣した。他部隊は一か月前より陣地構築をおこない迎撃準備や完了なり。自動車大隊は一線布陣後、翌日は米軍M四戦車を先頭にした優勢な敵部隊とそうぐうした。かくして五月三十日まで死守せり。

マンガヤン残留隊は他隊よりの補充要員等で修正七中隊を編成、輸送及び後方警備す。燃料不足で走行をおぎなうため優秀な機工兵の考案で特殊装置をとりつけ走行可能な自動車をつくった。ドラム缶を荷台にすえつけ、これから銅管を排気管をとおして加熱し気化器に注入し機関活動させる方法です。力は弱いが運転はできた。燃料は油と名のつくものは重油、軽油から廃油にいたるまで使用した。ただ排気煙は物凄く後方二百メートルぐらいは煙幕を張ったようだった。点火栓やその他部品修理用具は常時携行した。輸送任務時、急坂等を想定しあと押し要員を二十人ぐらい同乗させた。

パレテ峠天王山へ弾薬授受輸送は、登り口、サンタフエの橋梁が落下しているため川のなかをとおる。峠の向うのミヌリから米軍が夜間定点砲撃をやる。手前の山陰に車を停止して弾着を調べる。時間をはかって十分間隔と

か十五分間隔に何発かをたしかめ、着弾するとエンジン全開で対岸にわたる。このときあと押し要員は川中に先行し、いっきに車を押しあげる。最大の難事です。すこしの時間の無駄も出来ぬ。全員死に物ぐるいだ。数車両の時はなお大変だ。マツチをスッテ時計をみたら大声で怒鳴った。渡河し急坂のヘヤピンカーブ辺りで頭上を弾がうなりながら走る。首が自然にちぢむ。足もとの今渡った川のなかにドカドカと弾丸がつつこんでいる。あと一瞬の静寂、さあ出発だ。昼間の爆撃で一屯爆弾が道路の七割もけずりとして大穴が谷底までつづく。山がわをツルハシとスコップで整地し、やっと通過した。

すこしのぼったところに両脚負傷で歩行不能の兵がはっている。「帰りにアリタオ兵站病院へはこぶからな」と声をかけていく。途中某隊の車が二両おりて来た。特に注意を喚起して交差した。

任務なかば遂行し帰路につく。力の弱い車でもくんだり坂は快調に走る。負傷兵地点では前の車に収容されたかいないがなかった。大穴地点で驚いた。さきの車のわだちこんが一直線に穴にむかっている。穴に落ちたのだ。何十

メートルもの谷底で声のするような気がするが、救助する手段もなく東方の白むのを見て、心を鬼にしようげ道をくだった。

渡河地点は往路のくりかえし行動だ。サンタフェ・アリタオのなかほどのボネで夜があげた。

道路走行は不能だ。搭乗者は徒歩でかえれと指示、縦者と二人で車を橋のしたにしゃへいして日没を待つことにした。まもなく偵察機が飛来した。間一髪のしよちだった。後日判明するが、当時同地域はゲリラのそうくつだった。マンガヤニ基地から連日連夜各方面に対しての行動があった。

バレテ峠西方サラクサク峠は撃兵弾（戦車第二師団）の主陣地でここには歩兵三十九連隊第一大隊と搜索第十連隊が配備布陣していた。後方山麓イムガンまで道路が悪く挽馬車両をひっぱって輸送した。またバレテの東、旧スペイン道の鈴鹿峠に兵一人と連絡にいった。アリタオで渡河中にロッキード戦爆機の編隊が頭上にあらわれた。河のなかで釘づけとなり首からうえを水面に出してジット見守った。マンガヤン基地の西隣に撃兵弾の軽戦